

to heart

ひだまり通信

平成が終わるにあたって…30年前と30年後

先月フジテレビ系列で「東京ラブストーリー」の再放送があった。「カンチ!」で有名なあのドラマである。本放送が1991年なのでもう27年前のことになる。職員の方の中には当時まだ生まれていないという方や、まだ幼くて知らないとおっしゃる方も多いのではないだろうか。月曜9時、略して「ゲツク」という言葉が流行りだしたのもちょうどその頃だったと記憶している。

約30年経って、世の中はガラリと変わった。当時も携帯電話はあったが、加入料と端末代で30~40万円、通話料が4.5秒で10円以上という値段だった。当然所有しているのは会社の社長さんクラスのお偉いさんなどに限られ、一般市民には到底手のでない代物であった。テレビは24型で9万円前後、ビデオデッキも同じくらいの値段で売られており、現代では考えられない価格であった。クルマもハイブリッド車ではなく鍵も普通のカギで、今では当たり前になったキーレスですら超高級車でもオプション扱い、もちろん自動ブレーキなんてものは雲の上の存在である。それらが今では携帯・スマホは端末代も通話料も無料、テレビも32型で2万円台、ビデオデッキに至っては5000円で売られていたりもする。30年前には超高級車ですら付いていなかった装備が軽自動車にも付く時代となった。医療の分野ではCTが普及し出した頃で、今でこそCTのない病院を探すのは困難と言われるほど普及しているが、当時はCTがあるだけで「おっ!」と唸っていた。そのCTも時間の経過とともに高機能化・高性能化・高速化したにも関わらず、価格は据え置きかやや安くなっていると聞く。技術の進歩と低価格化にはすさまじいものがある。

来年4月で平成が終わり、5月からは新しい年号に変わるが、●●30年(年号不明につき●で表記)にはこれら白物家電やクルマはどうなっているのだろうか。おそらくこれらは全て自動化するのでは?とされている。冷蔵庫に材料を入れておけば、機械が勝手に調理して、食卓に並べ、人間はただ食べるだけ。後片付けも自動である。クルマは完全自動運転となり、乗り込んで目的地をセットすればあとは寝ても勝手に連れて行ってくれる。アメリカではすでに実用化に向けた試作車もできているらしい。(ただし事故をおこしたが。)

この自動化は医療の分野ではAI(人工知能)という形で関わってくるそうだ。AIロボットが患者問診から検査オーダー、検査結果の分析や治療方針の決定、治療まで全てを行うのである。先日、胃癌の内視鏡画像をAIに認識させ、癌の部位と治療方針を言わせたら人間医師の判断と全く同じだったという記事を見た。現在でも既に医療分野にAIが参入できる可能性があるのである。

家電や自動車の実質低価格化とは反対に、国民医療費は当時の20兆円から40兆円に倍増した。国はその医療費を削減すべく後発医薬品の推奨や診療報酬減額を打ち出し、財源確保の方策として健康保険料を増額している。又、重複受診や頻回受診の是正・在院日数の短縮などといった「医療費適正化」対策を講じているが、それでも医療費は右肩上がりが増えてるのが実情である。

そこにAIが参入すればどうなるか。これらの諸問題は一気に解決し、医療費は減額に転じると予想されているのだ。30年前には予想すらできなかったことが可能となる日本の技術力をもってすれば、30年後には医療の自動化は実現するのかもしれない。だがたとえ医療がAIによって自動化しても、AIには心がなくあらかじめプログラミングされたプロセス以外の行動はできないはずである。

我々医療従事者は「人」相手の職業であり「人」には心がある。心を無視して良い医療は提供できない。このことは昔も今も30年先でも変わらない。当院の病院理念は「すべての人に寄り添う医療」であるが、寄り添うためには心を知ることが不可欠だと思う。

病気を治すために受診されてくる患者様の心を知らずして病は治らないし治せない。

すなわちAIには病は治せないはずなのだ。

30年後に完治という言葉は存在しているのだろうか?

「カンチ(完治)!」…約30年前に流行った、たった三文字の言葉だが非常に奥の深い一言に感じませんか?

平成30年11月

一般病棟担当医 小野 隆之